

書評・上田幹一著「日本語教育の具體的研究」

金 田 一 春 彦

上甲氏の新著「日本語教育の具體的研究」は、一般外國人に對して日本語を教える場合に、心得るべき理論と實際方法を説いた勞作である。

従來、このような、外國人に對する日本語教授の方法を説いた文献は、幾つか出ており、中で、山口喜一郎翁の「日本語教授法原論」と、興水實氏の「日本語教授法」とは、前者は理論的思索の代表、後者は具體的記述の代表としてこの方面の人に重んぜられていたものである。然し山口翁のものは、難解キックツなうらみがあり、興水氏のものは、急ごしらえの感をなしとしなかつた。上甲氏の新著は、山口翁のものに見られる豊富な體驗および理論的考察と、興水氏のものに見られる具體的解説および明快な筆致とをかね備えたもので、まことに好ましい勞作と言いたいものである。

二

今、その内容のアラマシを紹介するならば、まず、序論六十四ページは、理論篇で、コトバの概念、言語の本質から説き起して、自國語と外國語、外國語教授法のありかた、外國語教材のありかた、外國語教授者のありかたへと筆を進め、一般に外國語というものを教える場合の、著者の理想とする方法を論じており、こゝで直接法主義・場面重

視主義・および特に主題。一本主義を結論する。次に、本論百四十六ページは、實際篇で、こゝで初めて日本語という特定のラングの問題に入り、まず、日本語の實態において、日本語の注意すべき性格を論じ、次の日本語教材及び教授法のありかた、各期の教材、各期の教法の各章においては、前篇に論じた直接法主義、場面重視主義および主題。一本主義による、日本語教授法の具體案を開陳したもの、本書の精髓というべきところである。そして卷末には、全般的注意を述べた結語と教授上の参考附表五つをそえ、出来上りは、B6版で二百二十二ページ、大著ではないが、各篇各章はよく呼應してきれいな統一を示しており、日本語教授上必要な事項は大體手際よく織り込まれている。細心の勞作と言つてよいものである。

三

さて、本書における著者の教授の根本精神は、前節に觸れたとおり、第一に直接法主義であり、第二に場面重視主義であり、そして特に主題。一本主義である。

まず、直接法主義であるから、授業中、その生徒たちの母國語は一語を交えないのである。次に、場面重視主義であるから、冬の真ツ最中に、サクラノハナハキレイダというような教材は絶対に使うことをしないのである。そして、主題一本主義であるから、例えば、月曜日の午前は發音の時間と稱してアイウエオの發音を教え、午後は文法の時間と稱して助詞「が」の用法を教える、というようなことはせず、發音も文法もその時の教材に結び付けて教えるのである。

この趣旨を聞いた人はどう思うであろうか。

「これは理論的には確かに結構な方法サ」もし多少とも日本語教育にたずさわつた人ならば、誰しもそう言うであらう。然し、それと同時に「そんな窮屈な方法では必要な事柄が短時日のうちに教えられるものではないヨ」そういう聲が聞えそうである。ところが著者は見事にその困難を克服して、教授案を建てているのであつて、本書の第一の意義は實にその點にあると思う。

まず、直接法主義および場面重視主義の實踐の好例は、第一時間目の授業の説明に見られる。由來、日本語の教師として一番頭を使うのは第一時間目の授業である。しかも事實それは大變重要な授業なのである。生徒たちは、ニッポンゴのニの字も知らない外國人たちである。彼等は非常な緊張をもつて教師の一舉一動を見守つてゐる。生徒たちが今後熱心にこの授業に参加してゆくかどうかは、かゝつてこの時間の教師の態度にあるのである。一體どのように授業を開始したらよいだろうか。一四〇べを開いて見よう。本書の教えるところは次のとおつである。

「お早うございます。」教壇上で禮をしながら、まずこう言え、というのである。直接法であるから、相手が日本語を分らうが分るまいが、構わずこう言え、というのである。そんなことを言つても、相手に通じないではないか。いや、なるほど生徒たちは、ニッポンゴを全然知らないかもしれない。然し、初對面の人同士は挨拶するものであることは彼等も知つてゐるにちがいないのである。それゆゑ、教師が禮をしながら「お早うございます」と言えば「あれは挨拶のコトバなんだな」ということを彼等は直ぐに察し得るはずである。そして自分たちもそう言うべきなんだなとまで氣付くかもしれない。

もつとも、生徒は、急にはそんな長いコトバをまね出來るわけではないから、持合せのコトバで“Good morning.”とやるであらう。然し、そこでほかの教材へ移つてはいけない。「お早うございます」は、その場合、場面に即したコトバである。すぐこれを取り上げて教材とするのが場面重視主義の行き方である。そこで、もう一度禮をして「お早うございます」とやるのである。

これは馴れない教授者には、チョットてれくさいところである。然しそんな弱氣なことでは先生はつとまらない。相手も大きななりをしたおとなであるが、子どもに歸つてアイウエオから學ぼうとしているのではないか。コッチもうんとくだけて出てこそ心と心の疏通が出來るのである。そこでもう一度、禮をしながら、「お早うございます」をやるのである。

今度は生徒たちは、ハ、ア、挨拶のコトバを教えているんだなと察するであらう。あるいは更に、自分たちにも言

え、といつてゐるんだな、とまで察するかも知れない。然しまだ間が悪いかハッキリ聞き取れないかして、黙つてゐる。そこで教師は改めて「お言いなさい」という。

勿論、このコトバは、それだけでは生徒たちには通じないはずである。ところが注意書きに、身振りとともにそう言え、とある。つまり、教師は自分の口のところへ指をあて、その指を前へ突出しながら、——いわば投げキッスのような身振りをしながら「お言いなさい」というのであろう。生徒はすぐ教師の意を察する。こうなつては、黙つてはいられない。そこで最初の日本語——生まれ初めて使うニッポンゴ、——オハヨーゴサイマスを實地に發音するに至る、とこういうしくみである。

次々の授業法の説明もすべてこの要領で書いてあつて、これならば、初めて教壇へ立たされる教師でも、オレにも何だか勤まりそうだという自信を得るであらうと思われる。人もし、この著書の一四一以下を讀んでゆけば、何びとも、熱心な、親切な、しかも頭の良い教師と、樂しげに學び、元氣に應答している生徒たちのいる、明るい日本語學校の教室を頭に描くであらう。或いは、窓の外の若葉のこすえには小鳥がさえずつてゐるかも知れない。

四

次に主題一本主義の良^いあらわれは、例えば八七べ以下の數系列教材の條にうかがわれる。讀者は、或いはこの教材を見て、小學校一年生の算術の時間の教授案のような、數ばかり教えてどうするんだ、とまゆをひそめるかも知れない。然し説明を讀むことによつて、これは決して單に數だけを教えるのではないことが知られるのである。

まず、數というものは、その論理および符號が諸民族共通であるという特徴をもつてゐる。だから、10+30と、いうように書けば、その意味はこの國の人にも分るのである。これは山口翁の創意だそうであるが、この點を利用して教材に使う、ということがまず面白い。

そして、2+3と書いて「二・三・チ・たす」と説明し、5-3と書いて「五・カ・ラ・二・チ・ひく」と説明しながら

ら、日本語を教えてゆくと、ニとかチとかカラとかいいうような、代表的な格助詞の基本的な用例が次々と現れて来る、というのである。つまり、教え方を教えながら、助詞の使い方を教えるという行き方で、これが即ち主題一本主義の鮮やかな現われである。

又、巻末附表三には、品物のちがいに基く教え方のちがいが掲げられてあるが、こゝにイチワ、ニワ、サンバ……ロッパという鳥を数える数え方が出ている。これは、こういう例を通して日本語においてハ行、ワ行、バ行、バ行が、互に連關をもつてゐることを教える、というので、これも主題一本主義實踐の例であるが、なか／＼頭がよいと思う。

もつとも、一一四―五べあたりの表を見ると、日本語教授の初期にこんないろいろの種類の助數詞を教えたら、生徒たちはそういうことに多く頭を使つてその學習意欲をくじきはしないか、とちよつと心配になる。仙臺はぎのセリフではないが「雀が三ビキとまつた」で、我々は別におかしいとは思つていないのである。われ／＼は助數詞の使い方には随分ルーズになつてゐる。一二べに見える銚や小刀の類の教え方、一一三べに見える椅子やテーブルの教え方は、むしろ教えない方がよいのではなからうか。

私としては、それよりも寧ろ、「書きます。練習をしましよ」(一一六五べ)とか「數を足します。計算を足し算といひます」(九四べ)とかいふ言い方を避けて、「書く練習を」とか「足す計算を」とかいう形を教えることに努力した方がよいと思う。

然し、とにかく著者が直接法主義、場面重視主義、主題一本主義に基いて、全教材を編成された努力はまことに敬服すべきで、たゞ、惜しまれるのは、紙面の制約のせいであろう。その具體的な教授案の詳細が明らかにされてないことである。

さて、本書を讀んで、全般的に受ける著しい印象を一つ述べておきたい。それは、出来るだけ多くの内容を、出来るだけ僅かの紙面に盛ろうとしている。しかも出来るだけ明確な平易な表現を用いて、たえず讀者の理解ということに心を使っているということである。一言にして言えば、良心的な著作である。

私は、前々節において、第一時間の授業で生徒に「お早うございます」を言わせるまでの説明に五十行を費したが、本書では、それはたゞの八行に收められているのである。いかに簡潔に壓縮して記述されているか知られるであらう。これは、この書がその簡所で、教授の區分と注意、教授者の言表と行動、豫想される學習者の言表と行動の三者を、それ／＼三段階に分けて掲げたという工夫によるものである。

又、理論篇の第一、二章あたり、言語學の基礎理論に關する重要な問題をテキパキ裁いてゆく手際はまことに目覺ましく、一九べにある獨語と對話の對照表、三九べにある自國語と外國語との對照表のごときも、要點をつかんで大變結構である。

たゞし、著者があまりに簡潔に記述しようとした結果、もう少し讀者に對する親切心が望まれる個所を作つたことは残念である。その代表的な例として、日本語の實態の章を指摘したい。

著者は、こゝで、日本語に關する多くの研究書をあげて具體的な日本語の實態の説明は一切省略された。然し、實際に、日本語教育にたすさわつて見ると、日本語の難しさ、説明しにくさがつく／＼感じられ、まことに拾収がつかなくなるのである。例えば、七四べの「おじいさんとおばあさんがありました」において、どうして「います」といわないのかという問題のごときも、その一例であるが、こういう問題は從來文法書で取扱つているものは先ずないといつてよく、すべての教授者自身自分で考えなければならぬのである。

私がやはり外國人に日本語を教えていた時「赤い」と「赤々」との區別をどう説明すべきかに困り、その道の先達松官一也氏に教えを乞うたところ「赤い」はたゞアカイのであるが「赤々」は赤クテ鮮ヤカナサマであると教えられ、なるほどと思つたことがあつた。「赤々」とか「青々」とか「類の語に「印象的な」という意義があることは、そう

聞けばいかにもそのとおりであるが、このような解釋は辭書を引いても到底知られるものではなく、たゞその道の人から人へ傳承されてゆく貴重な智識なのである。この意味において、このような智識を豊富にもつておられるはずの著者が、この間の記述を一切省かれたのは、本書にとつて最大のキズだと考えるのである。

然し翻つて思うに、著者がそういう記述を不必要だと考えたとは思われない。立ち入つてその間の事情を推測するのに、恐らく、著者は發行者から、與えられた紙面の制限を嚴密に守つた結果こうなつたものであろう。前篇の第五章あたりが極度に壓縮して書かれてあるらしいこともその現われと想像される。そうなると、責めは著者に十分な紙面を提供しなかつた發行者の負うべきものかも知れない。然し、紙面の事情がどうしても變更出来ないとすれば――それは大變惜しいことではあるが、前篇第一、二章あたりを割愛しても、日本語の實態の條をもつと充實させるべきだつたと思う。

即ち、この章において、もし、日本語の注意すべき諸點の解説を著者自身で施すだけの餘裕がないならば、そういう問題の箇所をあげて、それ／＼参考すべき文献の名を記す、という方法をとつてほしかつた。少くとも全卷殆ど全部が役に立つ三宅武郎氏の「敬語法」と役に立つのはほんの一部である日本方言學會の「日本語のアクセント」、よほど文法の智識のない人にしか必要のない淺野信氏の「日本文法辭典」と、よほど進んだ智識をもつた人にのみ適當な時枝博士の「國語學原論」などを、一緒に並べあげることは十分でなかつたと思う。

又、日本語の参考書としては、こゝにあげてあるほか、松下博士の「標準日本文法」「標準日本語法」、松本龜次郎氏の「日本語口語文法教科書」「日語骨幹大全」、藤原與一氏の「日本語」、ローズ・イニスの「日本語會話文法」、および齋藤秀三郎博士の「和英大辭典」、雜誌として、「日本語」全四卷、再刊「コトバ」全六卷をあげてほしかつたと思う。

以上、盲評をほしいまゝにして來たが、筆をおくに當り上甲氏個人に對する敬意を述べさせていたゞく。さきに、大東亞共榮圈華やかなりし頃は、ネコも杓子も日本語教育に狂奔の態であつたが、一朝時勢非となるや轉向者續出で、今日その壘を守る人はまことに寥々たるありさまとなつた。この中にあつて毅然として節を屈することなく、その道の研鑽を積まれてこのような好著を出されたことは本當に頭が下る思いがする。轉向者の私など合わせる顔はないのである。然し、今こそあれ、將來日本は必ず文化國家として立ち直り、世界の人々が翕然として日本語の勉強に向う日の訪れることを私は確信する。どうか、その時、またお粗末な日本語の先生が簇出して外國人を失望させないよう、研究に精進してゆかれることを切望する次第である。